View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Niigata Seiryo University Institutional Repository

幼児教育学科卒業生の就労能力に対する社会的評価

上野 春代・齋藤 貴子・山口 雄三

Social Evaluation on Working Ability of Graduates of the Department of Preschool Education

Haruyo Ueno・Takako Saito・Yuzo Yamaguchi

Ⅰ．はじめに

1）保育者養成に対する学科の教育理念・教育目標

学科発足から約40年経過し、学科卒業生は、5,000人以上となる。発足当初から学科は、幼稚園教諭と保育士（旧保母）の養成機関として認定されており、卒業生の多くが児童養護施設や知的障害児施設などの児童福祉施設や幼稚園、保育所などで保育の仕事に従事している。この間、保育をめぐる社会状況に大きな変化があり、それにともなう保育所保育指針の改定、児童福祉法の改定、幼保二元化から幼保一元化への国の姿勢の変化、子どもの権利条約の締結など保育者養成に関わる国の体制などにも変化があった。

発足当初、学科は音楽を通して保育実践ができる能力をもった保育者養成教育を行なっていたが、社会状況や国の保育行政が変化する中で、社会的要請に応えた実践力をつけられるよう、特に実習に重点を置いた教育体制づくりに努力してきた。

平成13年、新潟青陵女子短期大学の教育理念のもとに、保育者養成校としての特色を強くもつ学科の教育姿勢をめぐる学科内討議を経て、学科の教育目標を次のように設定した。

① 生命に対する畏敬の念を持ち、広い視野と慈しみの心で人間及び子どもの本質を理解できる能力を養う。

② さまざまなものに共感する心、それを表現する力を養うことにより、豊かな感性と創造性を養う。

③ 保育や子育てを取り巻く現実を直感し、主体的かつ創造的に保育を実践できる能力を養う。

2）保育者養成が目標とする保育者の資質について

保育は、無限な発達の可能性を生涯にわたって展開していく児童期の子どもの発達を支えることを本命とする仕事である。児童にとって何よりも重要な保育環境となるのは、日中の長時間にわたる園生活を共にする保育者の人間性である。

保育者の人間性には、深い人間愛や人間観、教養・常識、保育思想・保育理論、時代意識や民族

意識、宗教観、発達観、日本の家庭保育を支える者としての過去と将来の日本人文化に対する自覚など多様な要素が反映される。保育思想・理論は、保育者の人間性や保育技術等と結びついて保育実践を生み出すが、保育対象である乳幼児も保育者も常に発達し続ける存在であることから保育は常に流動的な世界となる。

このような流動的特質をもつ保育に従事する保育者の資質を明示することは至難なことではあるが、平成13年に学科の教育目標を設定した際に期待したいと考えた保育者の資質は、概ね下記のようなものである。

1．生命に対する畏敬の念をもっている。
2．広い視野からの慈しみの心をもって人間（子ども）を理解できる。
3．子どもの心をはじめとする様々なものに共感し感動する感性をもっている。
4．共感し感動した心を言語や音楽的、身体的、造形的表現手段などを通して相手に創造性豊かに表現できる。
5．子どもの現実を家庭や社会の子育て状況と関連づけて直感的に理解できる。
6．子どもの権利擁護の立場と今後の日本社会への展望をもって、施設や家庭における保育を主体的に創造し援助することができる。

ところで、上記に挙げた保育者の資質は、新卒者だけでなくキャリアの長い保育者にとっても目標となる本質的な資質でもある。

3）卒業生の就労能力に対する社会的評価

学科は、これまで多くの卒業生を保育現場に送り出す中で社会的な信頼も得ているという自負はあるものの、社会的評価を客観的に把握したことがなかった。今回、大学の自己評価・点検の一環として就職部と協同するかたちで、学科卒業生の就労に対する社会的評価をアンケート調査に関わったことから、ここにその概況を報告することにした。

Ⅱ　調査方法

1　調査方法

調査はアンケートによるもので、平成17年３月に卒業して幼稚園、保育所、施設などに就職した卒業生の勤務先である104個所の施設管理者あてに平成17年10月上旬に郵送し、上司による評価を依頼した。

104箇所の内訳は、私立が幼稚園と保育所、知的障害者施設の計70箇所である。公立は幼稚園と保育所の計34箇所である。

平成17年３月の卒業生を調査の直接対象者にした理由は、それ以前の卒業生の場合、勤務先に変更が生じることもあり所在が把握しきれないこと（特に公立の場合）、また卒業後の時間経過が長くなると就労状況が在学中の養成教育とは必ずしも結びつかないことも多くなるとの判断からである。

2　調査対象者

平成17年３月卒業生を直接対象とし、同時に同じ職場に本学の過年度卒業生がいた場合には過年度卒業生も間接対象者として、夫々の就労・保育能力について評価を依頼した。

3　調査内容

各施設に郵送したアンケートは、２種類から構成されている。１種類は、その職場に勤務している本学科卒業生全般を対象とした就労評価に関する調査紙である（①）。もう１種類は、16年度卒業生を対象とした就労評価に関する調査紙（②）である。

特に今回は調査のメインを後者に置いたことから、②の評価項目については学科の教育目標を柱に設定した。

調査紙①と調査紙②の内容は、下記のようになる。

＜調査紙①：本学科卒業生全般の就労に対する評価＞

■ 採用状況についてお伺いします。

Q１　現在貴園（所、施設）に本学卒業生は、何名いますか。

Q２　本学卒業生は、主にどのような雇用形態ですか。該当するものすべてに○をしてください。

１．正規職員　　２．臨時職員　　３．パート職員　　４．その他（　　）

Q３　本学卒業生を今後継続して採用したいと思いますか。該当するものに○をしてください。

１．はい　　２．いいえ　　３．未定

■本学卒業生の仕事全般に対する能力についてお伺いします。

Q４　四大卒業生と同等の能力がある。　Yes ←→ No　5　4　3　2　1

具体的なコメント、お気づきの点があれば記入してください。

（　　）

Q５　新潟県立女子短大卒業生と同等の能力がある。　5　4　3　2　1

具体的なコメント、お気づきの点があれば記入してください。

（　　）

Q６　専門学校卒業生と同等の能力がある。　5　4　3　2　1

具体的なコメント、お気づきの点があれば記入してください。

（　　）

■本学幼児教育学科についてお伺いします。

Q７　新潟青陵大学短期大学部幼児教育学科の印象を記入してください。

（　　）

Q８　新潟青陵大学短期大学部幼児教育学科に対する意見、ご要望があれば記入してください。

（　　）

＜調査紙②　今年度採用の卒業生１人１人（個人別）の職業能力評価＞

■今年度の本学卒業生の職業に対する能力についてお伺いします。

	Yes ←→ No				
Q９　広い視野をもっている。	5	4	3	2	1
Q10　深い愛情をもっている。	5	4	3	2	1
Q11　子ども理解ができている。	5	4	3	2	1
Q12　ひとり１人の子どもの最善の利益のために努力している	5	4	3	2	1
Q14　家族援助に対する力がある。	5	4	3	2	1
Q15　チームワークがよい（協調性）。	5	4	3	2	1
Q16　人間性は豊かである。	5	4	3	2	1

■本学卒業生の社会人としての基本的な資質についてお伺いします。

Q17　衣食住等の基本的生活能力（食事、洗濯、掃除等）　Yes ←→ No

がある。　5　4　3　2　1

具体的なコメントがあれば記入してください。
（　　）

Q18　一般常識（教養、言葉遣いなど）がある。　5　4　3　2　1
具体的なコメントがあれば記入してください。
（　　）

Q19　基本的なマナーを身につけている。　5　4　3　2　1
具体的なコメントがあれば記入してください。
（　　）

Q20　社会に対する「責任」の意識がある。　5　4　3　2　1
具体的なコメントがあれば記入してください。
（　　）

■ご要望をお伺いします。

Q21　本年度の本学卒業生に、今後さらに力をつけて欲しい領域がありましたら、該当するものに○をつけてください。複数回答可

1．発達理解　2．乳児保育　3．障害児保育　4．指導計画　5．福祉理論
6．保　健　7．栄　養　8．精神保健　9．音　楽　10．造　形
11．体　育　12．事故防止と安全教育　13．情報処理
14．その他：具体的に記入してください
（　　）

Ⅲ　結　果

郵送した104箇所の施設の中で、回答があった施設は、私立26箇所、公立33個所で回収率57%であった。

（1）①のアンケート調査結果（卒業生全般の就労評価）

質問１から質問６までの回答結果は、表１に示してある。

表１　卒業生全般の就労実態

	全体	私立	公立
Q１　現在、貴園（所、施設）に本学卒業生は何名いますか。	4.5	5.0	4.2
Q２　本学卒業生は主にどのような採用形態ですか。該当するものすべてに○をしてください。			
１．正規職員	48	21	27
２．臨時職員	32	13	19
３．パート職員	14	7	7
４．その他	2	1	1
Q３　本学卒業生を今後継続して採用したいと思いますか。該当するものに○をしてください。			
１．は　い	38	17	21
２．いいえ	0	0	0
３．未定	18	7	11
Q４　四大卒業生と同等の能力がある。	3.2	3.2	3.2
Q５　新潟県立女子短大卒業生と同等の能力がある。	3.5	3.7	3.4
Q６　専門学校卒業生と同等の能力がある。	3.9	4.0	3.8

回答から、下記のようなことがわかった。

・回答があった施設に勤務している卒業生総数は96名であり、公立54名私立42名で、施設平均が4.5名であった。内訳は、私立で平均5.0名、公立4.2名である。

・雇用形態では、全体として正規職員48名（50%）、臨時職員32名（33%）、パート職員14名（15%）、その他２名（２%）の割合だった。公立が正規職員27名（50%）、臨時職員19名(36%)、パート職員７名（13%）、その他１名（１%）である。私立が正規職員21名（50%）、臨時職員13名（31%）、パート職員７名（17%）、その他１名（2%）となっている。

・本学卒業生を今後継続して採用したいかとの質問に対する結果は、次のようだった。

全体では、採用したいが68%、未定30%であった。このうち、公立では採用したいが66%、未定が34%であり、私立では採用したいが71%、未定が29%であった。

・本学科卒業生と他養成校卒業生との力量を比較した評価結果は、次のようだった。

４大卒業生と同等の力の有無については、５段階評価で全体では3.2で、公私立とも同じ評価となっている。コメントには、力は個人的な差による、違いは感じられない、本学卒業生の方が保育能力は高い等がある一方、保育理論や思考力、応用力に違いがみられるなどもあった。

県立女子短大卒業生と同等の力の有無については、5段階評価で全体では3.5で、公立3.4、私立3.7となっている。コメントには、力は個人的な差による、学校の差は感じられない、能力差より人間性が大事などがある一方、記録物の内容などが浅い、取り組みの深さに違いがあるなどがあった。

専門学校卒業生と同等の力の有無については、５段階評価で全体では3.9で、公立3.8、私立4.0となっている。コメントには、本学卒業生の方が実践力、体育力、仕事に対する意欲などが優れているなどがあった。

質問７の本学幼児教育学科の印象を問う質問には、多くのコメントが寄せられたが、その主なものは、次のような内容だった

① 誠実で素直だが、創造性に欠ける。長い目で育つよう期待している。
② ピアノに優れているという印象をもっていたが、他校と差がなくなった。
③ 短大で学ぶだけでは、保育の世界では対応できない。専門性の獲得が必要。
④ 自主研修や事前準備などへの意欲が見られない。もっと情熱をもって自分から学ぶ姿勢をもつべき。
⑤ 工夫する楽しさや仕事に対する情熱をもつことが必要。

（2）②のアンケート調査結果（平成16年度就職者の個人別調査）

平成16年度卒業生で、就職者の個人別就労実態調査の質問結果を示したものが表２である。

質問9～16は、16年度卒業生が幼児教育学科の３つの教育目標を職業能力として職場でどれほど発揮しているかを把握し、養成教育効果を検討するための設問である。

ここにおける設問項目の全てが、平均して5段階評価3以上の評価を、特に、「深い愛情」や「ひとり1人の子どもの最善の利益のために努力している」、「チームワークがよい」などは平均3.9の評価を受けている。「子ども理解ができている」は3.6、「人間性が豊かである」は3.7となっていたが、「家族援助に対する力」は3.2と低く、「広い視野をもつ」と「養護や技術援助の力がある」は3.4であった。

しかし、個々の回答をみると「広い視野をもっている」や「養護や技術援助の力がある」、「子ども理解」、「家族援助」で１か２の評価をしている園もあった。

表２　平成16年度卒業生の就労に対する評価

	全体	私立	公立
Q９　広い視野をもっている	3.4	3.4	3.3
Q10　深い愛情をもっている	3.9	3.8	4.0
Q11　子ども理解ができている	3.6	3.5	3.7
Q12　ひとり1人の子どもの最善の利益のために努力している	3.9	3.9	4.0
Q13　養護や技術援助の力がある	3.4	3.5	3.4
Q14　家族援助に対する力がある	3.2	3.3	3.2
Q15　チームワークがよい（協調性）	3.9	3.8	3.9
Q16　人間性は豊かである	3.7	3.7	3.8
Q17　衣食住などの基本的生活能力（食事、洗濯、掃除などの）がある	3.9	3.8	3.9
Q18　一般常識（教養、ことば遣いなど）がある	3.8	3.6	3.9
Q19　基本的マナーを身につけている	3.8	3.7	3.9
Q20　社会に対する「責任」の意識がある	3.7	3.7	3.7

質問17～20は、16年度卒業生の社会人としての基本的資質についての設問である。

ここでは、いずれの項目も3.7以上の高い評価を得ているが、この資質に自由記述のコメントでは、以下のような記載がみられた。

ア　基本的生活能力に関しては、「きちんとしている」というコメントがある一方、「洗濯物の干し方がわからない」、「清掃に時間がかかる」、「果物の皮むきができない」、「コーヒーの入れ方がわからない」、「身の周りの整頓ができない」、「家事一般の経験が浅い」、「臨機応変に動けない」などのコメントもあった。

イ　一般常識に関しては、「目上や保護者の言葉遣いに注意している」、「礼儀正しい」、「穏やかで好感がもてる」などのコメントがある一方、「常識をもっと身につけてほしい」、「保護者への言葉かけができない」、「計算や文章の間違いが多い」、「学生言葉を使っている」などのコメントもあった。

ウ　基本的なマナーに関するコメントでは、「挨拶がよく、心が安定している」や「明るく素直」、「何でも進んで取り組む」など良好のコメントがある一方、「行動と遊びの区別がつかない」、「服装も腰が出ている」など保育者としての自覚に欠けた個人の存在があることを伺える記述もあった。

エ　社会に対する責任感に関するコメントには、「熱心に仕事をしている」や「報告・連絡・相談などがきちんとしている」、「意欲的に仕事をしている」、「常に先輩から学んでいる」など好感のコメントがある一方、「積極性に乏しい」や「自分の意見がない」、「責任に関して理解していない」などのコメントがあった。

以上のように、質問9～20の設問は、幼児教育学科の教育目標が卒業生の保育実践の上にどう反映しているかを評価する設問であったが、全体としては3以上の評価を得ていた。

しかし、個々の園の評価では、すべての項目に４か５の評価をしている園もあれば12項目中の9項目に１か２の評価をしている園が３園ある。コメントには「多方面の本を読み、新聞に目を通し身近な社会現象に関心を向けて会話が豊かになるように」、「掃除に時間がかかる」、「果物の皮

むきができない」、「コーヒーの入れ方がわからない」、「仕事を分担してもやらないで他の職員に迷惑をかける」などがあった。5～６項目に1か2の評価をした園が１園、3～4項目に2の評価をした園が４園あった。

それぞれの園のコメントには、「仕事は丁寧だが、周りの状況を見極めながら臨機応変に取り組めるようにしてほしい」、「1人1人の保護者に話かけができない」、「責任を理解していないことがある」、「行動と遊びの区別ができない」、「服装が不適切」、などがあった。一方、質問9～20の設問の全項目に３以上の評価をしている園の中に、「挨拶が不得意でよくできない」、「自己判断をする」、「周りの状況判断ができない」、「目上の者に対する対応の仕方」、「一人一人の子どもや保護者を見て話し掛けができない」、「相談や報告に欠ける」、「対応が１人で空回りしている」、「計算ミスや同じ失敗を繰り返す」、「協調性がない」などのコメントをしているところがあった。

質問21は、本学16年度卒業生に、今後さらに力をつけてほしい領域についてたずねたものであるが、その結果は、表３のようであった。

表３　本学卒業生に、今後さらに力をつけてほしい領域

	全体	私立	公立
1　発達理解	29	15	14
2　乳児保育	22	12	10
3　障害児保育	18	8	10
4　指導計画	9	6	3
5　福祉理論	3	1	2
6　保健	11	5	6
7　栄養	3	2	1
8　精神保健	7	3	4
9　音楽	12	7	5
10　造形	2	1	1
11　体育	1	1	0
12　事故防止と安全教育	41	22	19
13　情報処理教育	11	5	6
14　その他	23	13	10

Ⅳ　考　察

（1）卒業生全般に関する調査で、本学卒業生が他校卒業生と同等の能力を有しているかとの評価では、他の専門学校卒業生よりは高い評価を、本学と似ている他の公立短大卒業生とは同じ評価を、４大卒業生よりは低い評価を得ており、ほぼ予想していたような結果であった。

専門学校卒生より高い評価がされた理由をコメントから推察すると、本学卒生の実践力に対する評価のようである。これに対して、４大卒生よりはやや低い評価値になった理由が個人的能力差によるとしたことがコメントから伺え、具体的には思考力や理論、応用力などの面が４大卒生よりやや劣ると評価されたようである。これらの点を今後、どのように乗り越えて行くかが、学科の大きな課題である。

４大卒生、他短大卒生との比較で本学卒生に低い評価をした園のコメントをみると、「社会人としての基本的マナーの向上を目指してほしい」や「リズム、音楽を多く取り入れた保育実践,教育を望

む」、「本学が以前はピアノが優れていたが、現在は他校と差がなくなった」、「素直さや明るさはもっているが、自主性や積極性、自ら情熱的に学ぶ姿勢、創造性などに欠けている面がある」などの厳しい声が寄せられている。一方、厳しい要望を寄せた同じ園から、学科の今後の取り組みに期待したいとの声も寄せられており、厳しい中にも強い励ましが感じられる。

幼児教育学科の印象については、多くのコメントがあり、「伝統ある大學なので、細部にわたり行き届いている」や「幼・保の両方の資格が取得できると同時に、経験豊かな人材育成がされていると思う」、「実習生の様子から一生懸命に取り組もうという熱意は感じる」、「教職員の対応がとても丁寧で行き届いていると思う」「学生への挨拶や電話のかけ方などの指導もよくされていると思う」というのがある反面、「今まで縁故採用が多く、卒業証書さえあれば保育士に採用される面もあり、全員とはいえないが保育士として欠ける人もいるので良い印象はない」や「一般常識をしっかり身につけてほしい。本を読み、文章が正しく書けるよう」と間接的に常識のない人や正しい文章を書けない人もいる学校という印象をもっている方もいるようである。この点も今後の課題である。

（2）16年度卒業生の職業能力に対する個別調査の設問は、学科の教育目標から構成したが、５段階評価で質問９「広い視野」は3.4、質問10「深い愛情」は3.9、質問11「子ども理解」は3.8となっており、「広い視野」がやや低い評価だった。

質問12（子ども1人1人の最善の利益のために努力する）及び質問15（チームワークがよい）が3.9、質問16（人間性が豊かである）が3.7と高かったのに対し、質問14(家族援助に対する力)3.2、質問13（養護や技術援助の力）3.4とやや低い評価だった。

以上から職業能力は全体的に高い評価値を得ているとは言えないものの、卒業後の半年目の調査であり、しかも現場に慣れるのに最低は3年を要するという難しい保育職の能力評価であることを考えると、卒業生たちが本文の１に示した学科の教育目標の１と２に関する能力をある程度発揮していると捉えることができる。「広い視野」の値はやや低いが、人生経験がまだ浅い卒業生にとって、これも妥当な数値といわざるを得ない。しかし、学科の教育の課題として、この領域をどう涵養していくかも重要である。

豊かな人間性をもって、一人一人の子どもに目を向け、子どもたちのために一生懸命に努力はしているが、養護や技術援助の力や家族援助に対する力などのような実践的技術力が低く評価されている。保育の現場経験が1年未満の新卒者にとっての想像された実態である。しかし、現場では即戦力として働ける人を求める状況が強まっている昨今、保育の基本となる養護や専門的技術の獲得の充実を教育の中で取り組んでいく事は今後一層重要な問題である。さらに、子どもとの関わりだけでなく、家庭や家族、地域社会の動きなどにも深い関心と理解をもつ姿勢の涵養も重要である。

質問17～20の社会人としての資質を問う項目に対する回答結果では、いずれの項目も3.5以上で、平均値であったが、自由記述の中には、基本的生活能力である洗濯、掃除などができない等のコメントがあった。このような能力にみられる問題は、本学でも保育士の基本的資質の問題として、あらゆる機会に、特に入学時のオリエンテーション、実習指導の時間などに指導している。しかし、基本的生活能力は、日常生活の中で、特に家庭教育の中で獲得されるべきことも多いことから、今後とも家庭と協力して取り組んでいくべき大事な問題である。

質問9～20をもう少し掘り下げると、12項目すべてに４と５の高い評価をした園があった反面、多くの項目に１か２の低い評価をした園が公私立ともあった。このことは、これらの設問に対する園の評価が主観的になりやすく、評価基準に違いが存在した事が関係しているものと推測される。

質問21の、16年度の新卒者に今後さらに力をつけてほしい領域についての回答では、事故防止と

安全教育、発達理解、乳児保育、障害児保育、音楽、保健などの力が期待されていた。

このことは、専門的技術領域における実践力を期待しているということであり、最近の保育現場の動向－乳児保育や発達障害児保育のニーズや保護者の権利意識の高まりからくる子どもの事故のトラブルへの対応などの増加―などとも関係していると考えられる。さらに、本アンケートの回答者（評価者）は園長や主任などの立場にある方と考えられることから、回答者の経験年数や園における立場等も関係して、このような領域に対する力量獲得を期待しているものと推察された。

Ⅴ　最後に

本研究は、就職部が行なった就労実態調査を紹介したものである。アンケート実施、集計に関わる多くの作業では、就職部のスタッフの手をお借りした。

＜参考資料＞

1．「平成16年度　進路支援に関するアンケート調査」（第１報）、新潟青陵大学短期大学部、2005
2．島崎敬子　中野啓明　岡田斉　梅田優子　秋山博介　斎藤貴子　桜井慶一　山下安雄、「福祉施設における職員研修の現状と養成校の課題」、「保母養成研究」第12号、社団法人全国保母養成協議会